（様式２）報告書

令和５年度　小中一貫教育校報告書　阿戸小中一貫教育校

１　学校の課題

児童生徒は豊かな自然の中で、地域の人たちに見守られ、優しくのびやかに育っており、おおむね落ち着いた学校生活を送っている。一方で本校は各学年単学級で、各学年の児童生徒数が５～１９人となっており少人数の学級が多い。

令和５年度の全国学力・学習状況調査や広島県児童生徒学習意識等調査の児童生徒質問紙では「自分にはよいところがある」に肯定的な回答が、現中学３年で７８．６％、現中学２年で６０．０％であった。中学校卒業後、阿戸から広い社会に出たときに自信をもって、周りの人と協働し、集団や社会に貢献できる児童生徒を育成していかなければならない。

２　研究主題

自他を大切にし、集団や社会に貢献できる児童生徒の育成
～子どもが訊き合い、考える授業づくり～

３　取組内容

①　ふるさと未来科では、阿戸の地域について学ぶ学習について、各ブロックや９年間の系統性を持たせ、児童生徒の実態に合った課題解決型や探究型の授業を行えるようカリキュラムの充実・見直しを行う。

⇒　ふるさと未来科については、各ブロックや９年間の系統性を再検討した。それらをもとに、各学年で取り組む単元やつながりなどを再構築中である。また、７月と２月に「地域とのつながりを意識した教育活動について」をテーマとした研修会を持ち、各学年の実践報告を交流した上で来年度の取組内容について考えることができた。

＜ふるさと未来科の学習で育てた作物を使った独自献立の取組＞

②　学年の区切りを前期ブロック小１～小４、中期ブロック小５～中１、後期ブロック中２、３年とする。その中で中期ブロックを中心に、中学校教員を活用した専科授業を実施し、小中接続の視点で授業改善を図る。（中学校教諭による乗り入れ授業展開は以下４科目）また、月１回ブロック会を行う。

○音楽：小５，６	○図工：小４～６	○体育：小５，６	○外国語活動：小３，４

⇒　月１回のブロック会では、ICT 活用法の交流や、各学年での取組の様子、普段の授業や活動の悩みなどを交流することができた。

⇒　各ブロックにおいて、朝会や交流を行った。中期ブロック（小５～中１）では、ブロック朝会を６月、７月、１０月に行った。縦割りグループを作り、中１をリーダーとした進行や交流ができた。今後の課題として、朝会の定例化や活動内容の幅を広げることが挙げられる。

③　こども園・小・中学生の交流、地域人材を活用した授業や行事をおこなうなど、異年齢による交流を実施する。

【小・中の児童生徒同士の交流～小中合同行事について】

・　小中そうじ（年３回）　・　小中あいさつ運動（年３回）
・　運動会（５月）　・　文化祭（１０月）　・　給食朝会
・　給食放送の実施（通年）　・　部活動の小学生参加
・　体育委員（小）の体力向上取り組み

⇒　４月　中学校生徒会オリエンテーションでは小学校６年生も参加したことにより、中学校生活のイメージを持つことができた。

⇒　５月　運動会では、小中学生が一緒に係活動をしたことにより、交流が深まった。

⇒　１０月　文化祭では、中学校執行部と小学校委員会が合同で司会進行を務めたことにより、小学校６年生のリーダーとしての自覚も高まった。

⇒　小中合同そうじ（年３回）、小中合同あいさつ運動（年３回）では、縦割り７チームを編成し、中学３年生を中心に準備や計画、当日の声かけから反省会までを取り仕切った。中２、３年生のリーダーとしての自覚や、事前準備の大切さ、全体を見通す力が高まった。

⇒　通年を通して、給食放送を小中児童生徒でおこなった。その中で、委員会や係からの伝達もできた。また、ペットボトルキャップ回収運動や、にっこりポストなども小中合同で取り組むことができた。体育委員（小）による体力向上の取組として、鬼ごっこ大会や、５０ｍ走タイムアップなどをおこなった。

⇒　部活動（女子ソフトテニス部）では、初の小学生参加（小学５年生４名）があった。

④　小中合同の生徒指導会議、ICT 活用交流会をそれぞれ月１回おこなう。

⇒　月１回の合同生徒指導会議では、共通のファイルに追記していく形で記録を残し、生徒指導上の情報交流をした。

⇒　情報教育推進委員会を立ち上げ、ブロック会の中での ICT 活用交流や、情報活用研修会をおこなった。タブレットのちょっとした使い方などの交流や、Google フォームによるアンケートの作り方を実際に行った。

⑤　人権教育研究推進委員会を中心とした取組

・　授業スタンダード、道徳スタンダードの作成
・　教員同士の相互授業観察

⇒　授業スタンダード、道徳スタンダードを作成し、これらを基調とした授業展開を心がけた。教科の特性や、児童生徒の実態に合わせながら活用した。

⇒　後期（１０月～）は授業観察オリエンテーリングシートに記入しながら授業を見学し、気づいたことや質問などを放課後等に交流できるよう相互授業観察を行った。

⑥　学校運営協議会と児童生徒が協議をしながら、学校図書館改革を行い、読書活動（図書館教育）を推進する。

⇒　中学校校舎のほっとルームを中学校図書室としてリノベーションした。また図書のバーコード化等も進み、毎日昼休憩に図書室を開館したことにより、図書活動が活気づいてきている。

４　検証結果

児童アンケートの結果

学校評価アンケートより	R4.12		R5.7		R5.12	
	肯定	A	肯定	A	肯定	A
①本を読むことが好き	58	37	56	36	69	32

人権教育推進委員会アンケートより	R5.5		R5.7		R5.12		R6.2	
	肯定	A	肯定	A	肯定	A	肯定	A
②周りに認められていると思う	85	50	86	57	92	60	92	54
③楽しく学校に来ている	90	67	84	66	84	55	78	41

①「本を読むことが好き」という質問に対し、肯定的な回答が７０％近くまで増えている。
②「周りに認められていると思う」という質問に対し、肯定的な回答が緩やかに増えている。
③「楽しく学校に来ている」という質問に対し、肯定的な回答は減少している。

５　研究成果

検証結果①については、図書室改善および図書委員会の活動が、肯定的な回答を７０％近くまで引き上げた要因だと考えている。

検証結果②については、小中合同の活動内容や回数も増え、特に後期ブロックの生徒が、事前準備・気配り・下級生への声かけなど学校のリーダーとしての力がついてきたと思われる。またそのような姿を見た中期ブロックの児童生徒が、にっこりポストへの投稿を増やすなど、次代を担う自覚が感じられる場面が出てきた。ただし、検証結果③に関してはふるさと未来科の取組だけでなく、全教育活動をあげて取り組んでいくものであり、次年度以降の指標とするためには、アンケート項目を具体的場面が想起できるように焦点化して問う必要もあると考えている。

教員の授業観察オリエンテーリング活動や授業スタンダードの交流などは引き続き取り組むこととしたい。他学年（特に小学校⇔中学校）の見学・観察が増えることで、児童生徒への声かけが増え、自己肯定感の向上に寄与すると考える。

年２回行ったふるさと未来科に関する研修では、９学年のつながりが見え、教員が他学年での活動を意識することを目的とし，実施した。２回目の研修では，学校運営協議会の方も参加してくださり、地域の思いを伺うことができた。すぐには児童生徒の変化は見られないが、現在の学年で取り組んでいることが、次の学年または数年後の学年でどう生きてくるのかを、教員が意識して活動を仕組むことにより、その児童生徒が数年後次なる活動をするときに花開くことが期待できる。

また、それぞれの学年でのふるさと未来科で学習テーマを再整理することができた。今後はこれをいかに実践していくかが課題となる。ブロック会を中心に取り組んでいく。

さらに、ふるさと未来科の学習を深め，子どもたちの目指す力を育むためには，基礎的な学力の定着が欠かせない。学校図書館の活用とともに学力向上に向けた取組について今後更に研究を進めていく。

＜参考資料＞

阿戸小中一貫校　ふるさと未来科で付けたい資質・能力の系統表

「ふるさと未来科」における9年間で目指す子どもの姿
自立して生きていくための確かな3つの力（学力・心力・体力）と社会に通用する資質を身につけ、ふるさとを愛し、ふるさとに貢献できる子ども

学年		1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	7学年	8学年	9学年
地域とつながる学習	地域	学校を探検しよう	阿戸の町を探検しよう	阿戸のお祭りを調べよう	阿戸のホタルを紹介しよう	阿戸の特産物を見つけ、育てよう（小松菜，ホウレンソウ）	阿戸の特産物を育てよう（ババチャップトマト・米）	阿戸町のことを調べよう	阿戸町の農家で農業を体験しよう	阿戸提言
		通学路探検	町の施設調べ	学校の周りの様子		安全マップ作り（防災・防犯）		農業しらべ	農業体験学習 畑収穫	@Farm
	交流	盆踊り交流会								
		園小交流会				園小交流会	しめ飾りづくり	しめ飾りづくり	農業体験新聞・プレゼン作成	敬老会
									遠隔交流発信	地域の人との交流会
	福祉			くにくさ苑交流会	車いすバスケット体験			高齢者擬似体験	くにくさ訪問・交流	認知症サポーター養成講座

（様式２）報告書